

第2部ワークショップ

捕獲数を増やすためのアプローチ（体制整備の側面から）

一般財団法人自然環境研究センター 荒木良太

■捕獲数を増やす必要

環境省が実施した全国の生息数の推定・将来予測の結果によれば、今後生息数を減少させるには現在の捕獲数の2倍以上の捕獲率を確保する必要がある。国が掲げた目標「10年後（平成35年度）までに個体数を半減させることを目指す」での平成35年度の生息数はどのような意味を持つだろうか。環境省が実施した全国の生息数の推定に基づけば、おおよそ10年前の生息数に相当する。生息密度で表現すると、12～13頭/km²（推定生息数を現在の分布面積（森林のみ）で除した平均生息密度）となる。一般に言われる農林業被害や生態系への深刻な影響が発生する生息密度である。予定通り10年後までに個体数を半減させることが出来たとしても、ニホンジカとの軋轢改善に向けてはさらに長期的な個体数管理の取り組みが継続して必要となる。

■捕獲数を増やす方法

捕獲を担う狩猟免許所持者数は現在も減少・高齢化の一途をたどっている。捕獲を担う人員が限られる中、捕獲数を現在の2倍以上に増やすためにはどのような手段が考えられるだろうか。

近年、誘引狙撃法や大型囲いわなによる大量捕獲・高効率捕獲が注目されて取り上げられることがあったが、これらの方法は非常に限られた環境条件下で、特殊な人材や体制に恵まれた場合にのみ成功するものであり、広く一般に用いる事のできる方法ではなかった。今後、捕獲数を増やすためには、捕獲の担い手の体制的な整備を行うことが肝要であると考えられる。

捕獲には相応の技術と経験等が要求されるため、即時に捕獲の担い手を増員することは不可能である。短期的に捕獲数を増やす手段としては、現在捕獲技術を持つ捕獲の担い手を最大限活用する事である。「捕獲の稼働率を上げる」、「捕獲効率を上げる」ことが、まず行うべき事である。長期的に捕獲数を増やす手段としては、「新規担い手の育成」により次世代の捕獲の担い手の母集団を十分に確保しておくことである。

上記手段を含め、捕獲数を増やすための方策を探ることを目的として、研修参加者の活発な発言を通じて本ワークショップで議論を深めたい。

捕獲数を増やすための アプローチ (体制整備の側面から)

第2部ワークショップ
一般財団法人 自然環境研究センター

1

捕獲数を増やす必要

- 全国の推定生息数、将来予測の結果によれば、現在の捕獲数の2倍以上の捕獲率を確保する必要がある。
- 国が掲げた目標「平成35年度までに半減」の生息数は？

2000年代半ば頃の生息数

生息密度で言うと、**12～13頭/km²**

※推定生息数を分布面積（森林のみ）で除した平均生息密度

**2倍以上の捕獲率を維持しなければ
ならない期間は長期に及ぶ**

2

本ワークショップでは

- 捕獲数を増やすために何をする必要はあるか
- どれくらいの予算を新たに確保しなければならないか

3

捕獲数を増やす方法

- 狩猟者は減少の一途＝人員は限られている。
 - 短期的な手段
 - ✓ 手段①：人員の稼働率を上げる
 - ✓ 手段②：捕獲効率を上げる
 - 長期的な手段
 - ✓ 新規担い手の育成

4

捕獲数を増やすために必要なタスクを
挙げてみましょう

5

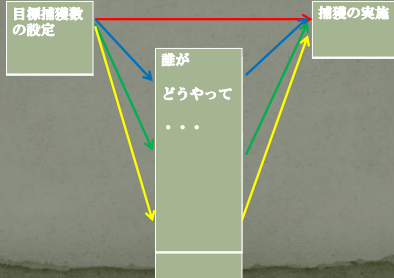
シート名：タスクレベル1

	A	B	C	D	E	F
1		目標の設定		実施		
2		Plan		Do		
3	タスク レベル1	目標捕獲数の設定	→	捕獲の実施		
4						
5						
6						
7						

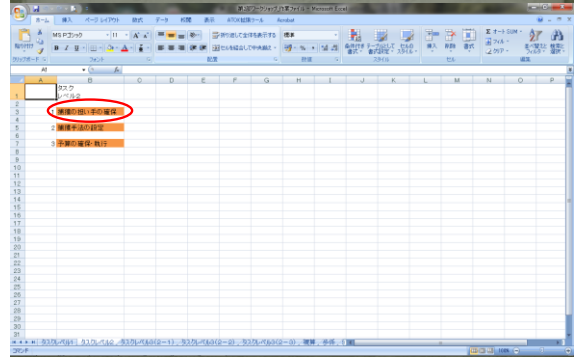
6

捕獲数を増やすために必要なタスクを挙げてみましょう

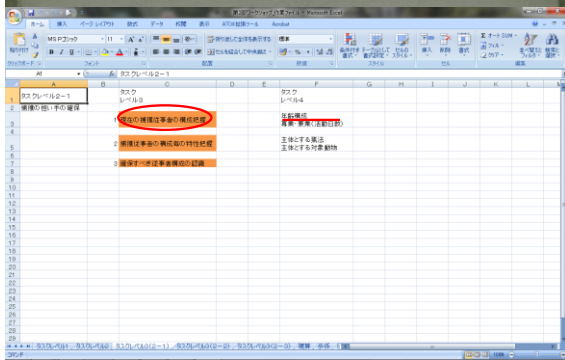
- 捕獲の実施までに何をしなければならないか



シート名：タスクレベル2



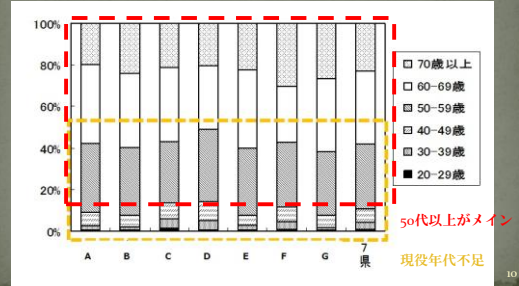
シート名：タスクレベル3 (2-1)



捕獲の担い手の確保

1 現在の捕獲従事者の構成把握

- 年齢構成



捕獲の担い手の確保

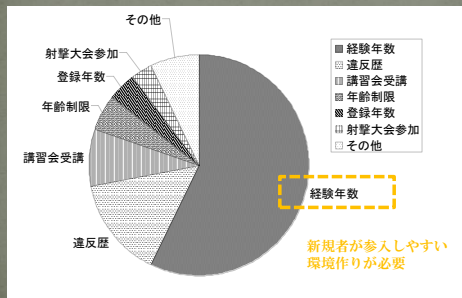
- 短期的な手段

□ 多くは50代以上の人々が捕獲の主体となるため、既存の手法を生かした捕獲設計が必要

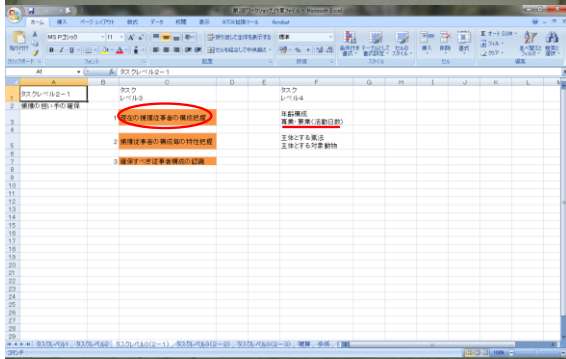
- 長期的な手段

□ 将来捕獲の担い手となる若い世代を増やす環境づくり（母集団は多ければ多い方がよい）

環境例) 捕獲隊の加入要件



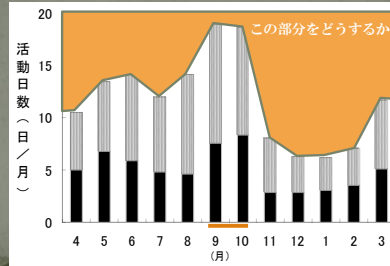
シート名：タスクレベル3（2-1）



捕獲の担い手の確保

1 現在の捕獲従事者の構成把握

- 週末等、限られた日しか出勤していない事が多い。(兼業的)



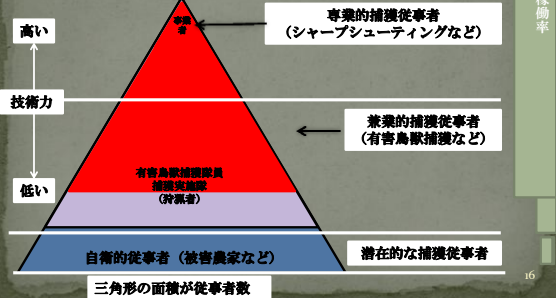
- 相応の捕獲技術、経験を持った捕獲者は限られている
- 週末等、限られた日しか出勤していない事が多い。(兼業的)

短期的手段①：人員の稼働率を上げる

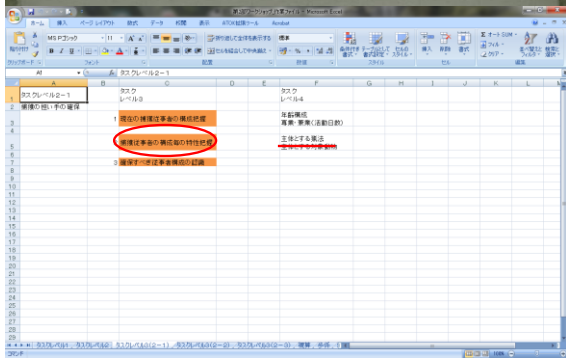
- 「兼業的」に活動している捕獲者を「專業的」に活動できる体制作り 20日/月
- 例) 国の補助を活用した十分な費用で専門化
 - ワイルドライフレンジャー（職員化雇用）
 - 捕獲等事業者（アウトソーシング）

現在の捕獲者の構造

- 相応の捕獲技術、経験を持った捕獲者は限られている



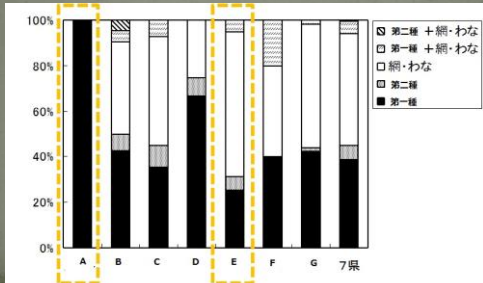
シート名：タスクレベル3（2-1）



捕獲の担い手の確保

2 捕獲従事者の特性把握

- 主体とする猟法



シート名：タスクレベル3 (2-1)

捕獲の担い手の確保 2 捕獲従事者の特性把握

● 主体とする対象動物

Region	鳥類のみ (%)	鳥類・獣類両方 (%)	獣類のみ (%)
A (銃)	15	35	50
B	10	40	50
C	10	30	60
D	10	30	60
E (わな)	10	30	60
F	10	30	60
G	10	30	60
7 果	10	30	60

短期的手段①：人員の稼働率を上げる 鳥猟者の活用

- 銃の所持手続き ハードル高い
- 銃の使用になれている → 止め刺し役として
- 鳥猟 → 獣猟 の可能性
- (ただし、相応の技術の習得、十分な安全管理が必要)

シート名：タスクレベル2

捕獲手法の設定

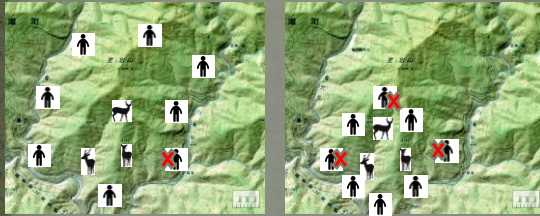
- 1 現在ある情報の整理
- 2 捕獲手法の特徴の把握

- 各猟法の日撃効率と捕獲効率がどのようになっているか
- 各猟法がどのように実施されているか

短期的手段②：捕獲効率を上げる

- 地域の実情にあった捕獲効率の高い手法を推進する
- 既存猟法の選択 (巻き狩り、忍び猟や、わな猟)
 - 例：生息密度が高い地域で、取りこぼしが多く、スレが進行しやすい大規模巻き狩り、は不適。猟法を転換

例) 大規模な巻狩り→小規模巻狩り



実施面積の広い巻狩り

実施面積の狭い巻狩り

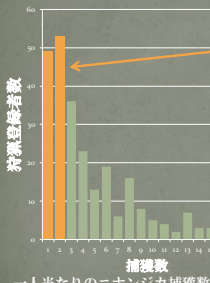
シート名：タスクレベル3 (2-2)

A	B	C	D	E
タスクレベル2	タスクレベル3			
捕獲手法の設定	1 現在の捕獲の状況把握	現在ある情報の整理(捕獲報告、出庫カレンダーなど)		
	2 捕獲手法の目的の把握	現在不足する情報の整理(猟法の詳細、捕獲者が抱える技術的課題など)		
	3 実施する捕獲手法の記録			

捕獲手法の設定

1 現在ある情報の整理

- 捕獲報告：一人あたりの捕獲頭数



1~2しか捕獲していない人が多い

少ないが、多頭捕獲している人もいる

シート名：タスクレベル2

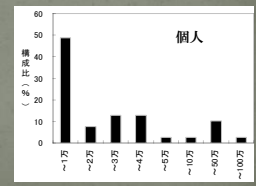
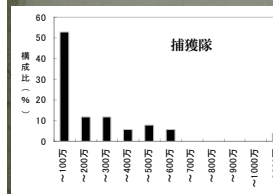
A1	B	C	D	E
タスクレベル2				
1 捕獲の担い手の確保				
2 捕獲手法の設定				
3 予算の確保・執行				

シート名：タスクレベル3 (2-3)

予算の確保・執行

1 必要予算額設定のための情報収集、検討

- これまではボランティアベースで捕獲が行われているため、歩係、単価設定の基となる情報が無い。



年間報額額 (円/年) の例 (平成18年度調べ)

シート名：歩掛

シート名：タスクレベル3 (2-3)

予算の確保・執行 2 捕獲計画の設計

- 生息数を減らしていくには、2倍以上の捕獲数を確保していく必要がある。
- 推定された目標捕獲頭数の最低1/2を担保する捕獲計画が新たに要求される。
- 現状の捕獲数(努力量)に限界を感じているならば、上記1/2は专业化を考慮した捕獲技術者による捕獲にする必要がある。

予算の確保・執行 2 捕獲計画の設計

- どこで、誰が、どのように、どれくらいの捕獲数を確保するか
 - どこで
 - ▶ 農地周辺、里山、奥山
 - 誰が
 - ▶ 農地周辺：農家+捕獲技術者
 - ▶ 里山・奥山：捕獲技術者
 - どのように
 - ▶ 奥山：宿泊が伴うことを想定

シート名：積算

シート名：PERT



まとめ

- まず行うべき事は、「捕獲の担い手確保」「捕獲手法の設定」「予算の確保・執行」のための捕獲状況の現状把握である。
- 特に、これまでボランティアベースで捕獲が行われてきたため、歩係、単価設定の基礎となる情報が皆無である。早急な基盤整備が必要である。
- 長期的視点にたった、次世代の捕獲の担い手確保も非常に重要である。